

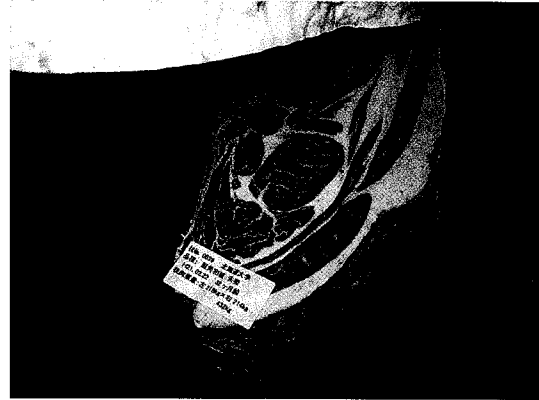
資源循環型の牛肉生産を普及・浸透を目指して——  
肉専用種枝肉共励会・資源循環型牛肉生産シンポジウム開催

(株)ミートコンパニオン 植村 光一郎

地域の副産物や自給飼料を活用する資源循環型の牛肉生産を普及・浸透させようと、北海道アンガス牛振興協議会、北海道日本短角種研究会の共催による第1回北海道肉専用種枝肉共励会と第8回資源循環型牛肉生産シンポジウムが、11月2日、北海道帯広市の(株)北海道畜産公社十勝事業所で開かれた。共励会にはアンガス部門10頭、アンガス交雑部門7頭、日本短角和種部門10頭の合計27頭が出品され、審査の結果、アンガス部門では(有)ワタミファーム(弟子屈町)、アンガス交雑部門が(株)カシワダイリンクス(大樹町)、日本短角和種部門が北海道大学(静内町)の出品した枝肉がそれぞれ最高位に選ばれ、高橋はるみ北海道知事より知事賞が贈られた。

このうち、日本短角和種部門で最高位に輝いた北海道大学の枝肉は、2009年2月に素牛を導入後、33ヵ月肥育。出荷体重755kg、枝肉重量432kgで、ロース面積49cm<sup>2</sup>、BSM 2のA2等級。黒毛和種とは全く違う肉質だが、あいさつに立った北海道アンガス牛振興協議会の内藤順介会長は「自給飼料や環境を考慮した生産方式をとり、消費者とつながり霜降り偏重の肉質評価をくつがえし、健康でおいしい牛肉生産につなげたい。そして、肉牛と人間の共存を目指したい」と今後の活動の展開方向を示した。

共励会後に行われたシンポジウムは、主催団体に循環リサイクル肉牛協議会が加わり「地域副産物・自給飼料活用による牛肉生産と求められる肉質」をテーマに行われた。「牛肉のおいしさの根源と牛肉の品質表示」(家畜改良センター・河村正氏)、「日本短角牛肉の新たな肉質評価法」(帯広畜産大学・口田圭吾氏)、「アンガス牛によるeーびーふ生産の取り組みと今後の展望」(榛



日本短角和種部門で最高位に輝いた北海道大学の枝肉

澤牧場・榛澤保彦氏)のタイトルで講演、研究成果、話題提供が行われた。

流通代表として招かれた筆者は、「求められる生産者とアグリフードチェーン」の表題で講演した。消費者に対しての放射能汚染牛肉の埼玉県生産者の取り組み、沖縄県、岡山県、静岡県の新しいブランド化の取り組み、国産和牛輸出の現状、中国での和牛F1生産の取り組みなどを紹介。

昨今、TPPへの参加協議の問題が浮上し、首都圏から離れた生産地では多くの試行錯誤が繰り返され、消費者との交流の糸口から個性のある肉牛生産が始まっている。これまで黒毛和牛のブランド化が推進されてきたが、環境問題、自給飼料活用、健康志向や地域特性等を切り口にした日本短角種、褐毛和種やアンガス種の飼養管理にこだわった肉牛生産の取り組みも行われており、その成果が見え始めている。今後、消費者の購買活動が生産工程に大きく関与しているという認識を持つ生産者によるアグリフードチェーン構築が大きなカギになるだろう。

(うへむら こういちろう・(株)ミートコンパニオン常務執行役)